

ライフヒストリーから見る食卓の変化

学籍番号 12012069 番 上田都史佳

指導教員 立木茂雄

## 目次

### 第1章 序論

### 第2章 先行研究の展望

#### 第1節 食卓の歴史

##### 第1項 銘々膳の場

##### 第2項 チャブ台の時代

##### 第3項 チャブ台の衰退とテーブルの普及

##### 第4項 現代の食卓風景

#### 第2節 家制度から近代家族へ

##### 第1項 家制度とその解体

##### 第2項 日本の近代家族

#### 第3節 食卓と家族

### 第3章 方法

#### 第1節 調査概要

##### 第1項 調査対象者

##### 第2項 調査の手続き

#### 第2節 分析の手順

##### 第1項 家制度と近代家族の特徴

##### 第2項 分析の具体的手続き

### 第4章 ライフヒストリー

#### 第1節 上田晃道のライフヒストリー

#### 第2節 上田紀美子のライフヒストリー

### 第5章 考察

#### 第1節 家族の変化

##### 第1項 改装前の家族の変化

##### 第2項 一度目の改装における変化

##### 第3項 一度目の改装後の変化

##### 第4項 二度目の改装による変化

##### 第5項 変化していないもの

第2節 家族の変化と食卓

第1項 一度目の改装

第2項 二度目の改装

第3項 おわりに

参考文献リスト

付録

## 1 序論

家族は普遍的なものではない。私たちが「あたり前の家族」と思っている家族は、決してあたり前の家族ではなく、時代とともに変化し続けているのである。にもかかわらず、多くの場合私たちは、自分の現在の家族生活や家族内のルールを、あたり前のものとして考えている。家族の生活は、食事風景一つをとっても、銘々膳、チャブ台、テーブル、と大きく変化している。銘々膳、チャブ台、テーブルでの食事風景は、その時その時の「あたり前」なのである。それでは、どのようにして家族内の「あたり前」は作られ、家族に受け入れられてゆくのだろうか。そして、その変化は家族の人間関係の変化とどのように関係するのだろうか。私はそんな疑問を持つようになった。

そこで私は、家族関係がもっともよく象徴される食卓風景に焦点を当て、「チャブ台からテーブルへの食卓の変化は、家族が家制度から近代家族・脱近代家族へ変化したことにより起こった」という仮説をたてた。家族の食卓における「あたり前」の変化をみてみようと考えたのである。仮説を検証するために、筆者自身の祖父・祖母に聞き取り調査を行った。家族が、一気に変化したとは考えにくいいため、聞き取り調査を行うことによって、家制度・近代家族・脱近代家族へと家族が変化していく様子を、詳細に読み取ることが必要であった。

これまでチャブ台からテーブルへの食卓の変化の理由については、新築・改築など家屋の変化や住宅公園の集合住宅の普及が主な理由とされており、家制度・近代家族・脱近代家族という家族の変化と、食卓の変化の関係に関しては詳しく述べられていない。今回、聞き取り調査を行うことで、食卓が変化した時の家族の具体的な営みが明らかになるはずである。

## 2 先行研究の展望

### 2.1 食卓の歴史

日本人の食卓は、この一世紀の間に、銘々膳、チャブ台、ダイニング・テーブルへと変化した。本節では、近世以降の食卓の歴史について述べていきたいと思う。

#### (1) 銘々膳の場

『食事の文明論』を記した石毛直道は、日本の食卓の歴史について次のように言及している。石毛によると、日本の伝統的な食事の場は、家族の全てに一つずつの膳がくばられ、

全ての食物を膳にのせて配給してしまう、「銘々膳」であった。膳には身分や格が象徴され、その風潮は民衆の家庭内にも存在した。銘々膳での食事の場面では、上座と下座の順序や、家族と使用人などの別がことのほか重視され、江戸時代から続く「家」の秩序を反映するものであった。分配の責任者は主婦であり、主婦権の象徴はシャモジであった。麦飯を茶碗に盛るとき、白い飯の部分を家長と長男に盛り、次男以下の家族は麦飯を食べさせられ、家長・長男にだけ魚のオカズがつけられるというように、銘々膳での分配原理にも、日本の「家」の原理が働いていたのである（石毛 1982）。

また、銘々膳における日本の食事は家族内の公的行事という性格をもち、そのことが食事の場の秩序を支えていた。このような食事の場は、食べることを楽しむというよりは、子どものしつけの場であり、禁欲的な節度や行儀作法といったふるまいかたをたたきこむことがなされたのである。日常生活の中での家族の公的行事としての食事の場を直接的に権威づけていたのは、家長としての父親であるが、その背後には死んだ祖先の霊や神々がいた。神棚や仏壇にミニチュアの食器に盛った食物をささげ、祖先や神々と共食をしていたのである。食事に参加した家族以外の「誰かに見られている」という潜在意識が食事の場の秩序を支えていた。日常生活の中での神聖な行事であるがゆえに、食事の場は静粛なものであり、緊張感が存在するものであった（石毛 1982）。

## （2）チャブ台の時代

石毛直道、井上忠司らは、1991年に『現代日本における家庭と食卓 銘々膳からチャブ台へ』において、食卓の変遷に関する詳細な報告をまとめている。井上らは、聞き取り調査による食卓の変遷の実態調査を報告しており、「銘々膳」から「チャブ台」へと移行した時期を明らかにしている。井上らの調査結果によると、チャブ台の普及は1920年代から、30年代にかけて急上昇し、1925年頃には銘々膳を上回っている。普及は都市部において始まり、遅れて農村部へ広がった。いずれの時代においても、チャブ台の普及はサラリーマン家庭が中心であった。チャブ台へと変化した理由として最も多く見られたのは、チャブ台の「便利さ」と「時代の流れ」、「衛生的」の三つであり、結婚や家の転居などのきっかけでチャブ台を使用するようになるのが一般的であった（井上 1991）。

チャブ台は、家族全員が同じ食卓をかこむという、まことに画期的な食事の形式であった。そのため、当時の識者たちは、明治30年代にこのチャブ台に目をつけて、「家庭の和楽」や「一家団楽」の実現に期待をよせていた。しかし、チャブ台で食べるようになって、畳に坐ることは同じであるし、食物は個人別の皿に盛り分けられるのが原則であり、

上座と下座の順序や、食前に神仏に供物を供えるという習慣はひきつがれることとなった。そのため、多くの家庭では、銘々膳を使用した時代の延長にある雰囲気のもとで食事をしていたのである（石毛 1991）。

### （3）チャブ台の衰退とテーブルの普及

「チャブ台」が「(椅子式)テーブル」にとってかわられたのは1971年（昭和46年）頃である。このとき、銘々膳は、家庭から完全に姿を消すこととなる。一般にテーブル式の食卓が普及するのは1956年（昭和31年）に日本住宅公団が2DKの集合住宅を供給するようになってからである。住宅公団の2DKの間取りの集合住宅は、予算の関係から食堂にあたる部屋をつくることが不可能になったため、台所で食事をするスタイルにすることで、「寝食分離」を実現させたものであった。矮小化した都市住宅に強引に持ち込まれたDKではあるが、コンクリートの公団住宅に住むことが理想とされた当時の世相とあいまって普及していった（石毛 1991）。

いわゆる「茶の間」はDKという食事室兼台所にとってかわられた。台所が、ついに居間の一部になったのである。このDKが家庭内の中心的な位置をしめるにつれて、家庭のなかから公的ないしはハレの空間が消滅していった。座敷（居間）が消えて、家庭は、いわば私的な空間ばかりとなった（井上 1999）。

その結果、上座と下座の席順、よそう順、箸をつける順にも反映され、食前に神仏にも儀礼的な食事をささげ、家族の不在者にも陰膳を置く、「家の公式行事」あるいは、「儀式としての食事」や、こどものおしゃべりを禁じる、「しつけの場としての食事」の性格はなくなった。ダイニング・テーブルの食事が普及する頃になって、かつての思想主義者たちがチャブ台にもとめた「家族水いらずのだんらん」の場としての食事、家族間の平等が実現したのである（石毛 1991）。

### （4）現代の食卓風景

現代の日本の食卓がすべて、テーブルに収斂しているというわけではなさそうである。チャブ台とテーブルの両方の食卓を備えている家庭もあれば、こたつを食卓として利用する家庭もある。また、新しい傾向として、カウンター形式の食卓を採用する家庭もみられる。日本じゅうの家庭が、銘々膳、あるいはチャブ台で、食事をしてきた時代に比べると、現代の食卓は多様化しているといわざるをえない。規範から自由になることによって、多様化が進行したものともいえよう。別の言い方をすれば、無規範になっている。それは「家の制度」を擁護する道德規律とむすびついた明治以来の国民文化が力をうしない、無規範

的な大衆文化の時代となった日本社会の動向と歩調をともしする現象である。(石毛 1991)

現代の大部分の家族に共通する席順の原則というものは存在しないといってよい。それぞれの家庭の事情に応じて、自然発生的に食卓の席順が成立するのである。かつての「家制度」の秩序を象徴した席順はなくなり、主婦の作業能率と、テレビをみやすい位置によって食卓に占める位置が決まるのである(石毛 1991)。

## 2.2 家制度から近代家族へ

食卓の風景の変化とともに、家族も大きな変容をとげている。本節では、日本の家族の家制度から近代家族への変容について述べたいと思う。

### (1) 家制度とその解体

『家の変動ノート』を記した松本通晴は、戦後の「家の解体の図式」を次のように著している。

#### ・ 構造

家の永続

家の観念・・・世代・階層・職業・農村都市間の分裂。潜在化。消滅。

家の成員・・・直系家族成員の縮小。傍系・非血族成員の離脱。

核家族化の傾向の地域的格差

家の氏・・・夫又は妻の氏

家長権

長子による継承・・・権限の委譲、縮小、喪失、親権夫権の顕在。

長子単独相続・・・分割相続の傾向。

#### ・ 機能

先祖祭祀・・・世代間・地域間の差異。儀礼の形式化。

生活保障・・・成員の経済的独立。固有ないし本来的機能化。

#### ・ 物質的基盤

家業(経営)・・・異種就業形態(家族労働の評価)

家産・・・財産ないし生産手段化

家の構造をあらわすものの一つとして、「家の永続性」が挙げられる。家の分裂、潜在化、消滅などの言葉にもあらわされるように、家の永続性を支えてきた家の観念は、戦後、世

代により、職業や階層、地域社会の所属を異にすることによって解体してきた。また、傍系家族成員や非血族成員が離脱し、直系家族が核家族化することによる家族構成の縮小も家の永続性の消滅の要因となっている。家の構造をあらわすもう一つ概念は、「家長権」である。通常、家長権は先祖祭祀、座席、家族労働の指揮監督、財産相続、動産の管理、家の代表の諸権限としてあらわされる。しかし、その権限は委譲もしくは消滅し、農村における分割相続の登場により、家長権と関連していた長子単独相続も解体したのである(松本 1981)。

家の機能的解体については、先祖祭祀の機能と生活保障の機能のふたつに分けられる。先祖の祭祀は家の超世代的な永続性と密接不可分のものである。しかし、この祭祀行事に対しては、儀礼の形式化と地域間および世代間の差異が明瞭になっている。また生活保障機能についても、家族は個々の成員の経済的独立を促し、保護機能、教育的機能、娯楽機能といった副次的機能も次第に失っているのである(松本 1981)。

最後に家の物質的基盤の解体過程を取り上げる。家は家族成員のたがいの共同体験のうちに持続されている。これには祖先伝来の家業経営が基礎的条件の一つをなすが、家族労働力の比重が高く、経営と家計が融合したような家業の形態は、戦後著しく解体していることは明白である。また家産についても、家族の維持を目的とし、祖先の祭祀を絶やさぬため、自由な処分を禁止・制限された家族共同の財産であるという、かつての家産の観念は崩壊したのである(松本 1981)。

## (2) 日本の近代家族

近代的な家族というと民主的な家族のことかと思うかもしれないが、家族の社会史的研究から出てきた「近代家族」の概念はそれとはかなりニュアンスが異なる。『21世紀家族へ』を記した落合恵美子は、日本の近代家族の特徴を次のように述べている。

家内領域と公共領域の分離

家族構成員相互の強い情緒的關係

子ども中心主義

男は公共領域・女は家内領域という性別分業

家族の集団性の強化

社交の衰退とプライバシーの成立

非親族の排除

核家族



これらの項目は、どれもみんな近代家族の特徴などというまでもない、家族なら一般的に持っている性質であるようにみえる。しかし、このような家族は実は普遍的ではなく、近代という時代に出現した歴史的現象にすぎないのである（落合 1994）。

大正期の日本においては、社会全域にこのような近代家族が存在していたわけではなく、都市の中産階級だけが、女中さんのいる近代家族をつくっていた。それが大衆化して、社会のどの位置にいる人にとっても同型的な近代家族が成立していったのは戦後のことである（落合 1994）。

1960年代になると、家制度と決別しないままの核家族化が進行する。当時の核家族は、多産少死から少産少死への人口転換の移行期にあたる、多産少死の第二世代が主流となり作った家族であった。長男・長女が同居し、のこりのきょうだいは家を出て、核家族を作るというように、きょうだいが多という人口学的な理由で核家族化はしていたけれども、大家族を夢見る核家族だった。核家族化してよかったとも思っていたし、家制度は窮屈だとも思っていた。戦前の「家」と質的にはずいぶん変わったが、家制度が完全になくなる必要はなく、少なくとも、直系家族制の同居規範はすぐに消滅したわけではなかったのである。この、家制度と近代家族の二重構造は 1975 年まで続くこととなる。1975 年以降、核家族率は頭打ち、もしくは低下する。単独世帯の増加と並んで、一夫婦当たりの成人する子どもの数の減少が、その原因である。この人口学的な理由によって、家制度はいよいよ本当に消滅するか、根本から変質せざるをえないところに至っている。（落合 1994）

そして現在、30 代前半での独身率は男性 4 割、女性は 2 割を超え、子どもが手を離れた母親の七割は家庭の外で働き、「標準をはずれた人々」がいまや多数派になりつつある。誰もが似たようなライフコースを歩み、似たような近代家族を作った家族の時代が終わり、いよいよ「個人を単位とする社会」が始まるのではないだろうか（落合 1994）。

### 2.3 食卓と家族

以上のように、チャブ台・テーブルの普及に関する実証的な調査や、家庭の食卓の文化、家族をテーマにした論文は数多く発表されている。しかし、日本の家族が封建的で家父長的な「家」から、近代的で民主的な「家族」へと変化したことと、食卓がチャブ台からテーブルへ変化し上座・下座のような規範が消滅したとの関係を実証する研究はなされていない。一般に、テーブル式の食卓の普及原因については、限られた居住空間を有効に活用するために DK が出現したことが理由とされることが主である。また、井上らの調査に

において、テーブルを食卓として採用した理由として挙げられているのは、新築・改築など家屋の変化を機にテーブルを使いだしたという趣旨のものであり、テーブルを使用するようになった結果として家族規範が消滅したというものである。家族内にどのような変化があり、テーブルを使用するに至ったのか、家族の移り変わりとどのように関係していたのかについては述べられていないのである。

### 3 方法

前章の先行研究から、家制度・近代家族・脱近代家族という家族の変化が、食卓における家族規範に影響をあたえたかどうかに関して、実証的な研究はなされていないことが分かった。そこで私は「チャブ台からテーブルへの食卓の変化は、家族が家制度から近代家族・脱近代家族へ変化したことにより起こった」ということを仮説として、調査を行い、仮説を実証したいと思う。

#### 3.1 調査概要

##### (1) 調査対象者

仮説を実証するために、著者自身の祖父、祖母に聞き取り調査を行った。祖父と祖母は、戦後の家制度と近代家族の二重構造の時代から、1975年以降の「家」の最終的な解体までの時期に、家族を作る主流となった世代にあたるからである。祖父の上田晃道は、1929年に富山県の真言宗の寺院の次男として生まれたが、戦時中に長男が亡くなり、同寺院の住職となっている。祖母の上田紀美子、旧姓藪本紀美子は1933年に和歌山県の真言宗の寺院の次女として生まれる。その後、見合いを経て1954年に晃道と結婚している。調査の対象となるのは晃道と紀美子が結婚してから後の上田家である。

##### (2) 調査の手続き

今回の聞き取り調査では、被調査者の誕生から、上田家でテーブルを使用するようになるまでのライフヒストリーを、出来る限り自由な形で語ってもらった。調査は、2004年10月に数回行い、録音テープは、祖父・祖母それぞれにつき4時間から5時間程度となった。

また聞き取り調査を補完するため、改装前、一度目の改装後、現在、それぞれの上田家の見取り図を、晃道、紀美子の話をもとに作成した。見取り図を作成することにより、家屋の中での食卓の位置変化が、より理解しやすくなるはずである。

## 3.2 分析の手順

### (1) 家制度と近代家族の特徴

聞き取り調査で得たライフヒストリーから、上田家における家制度・近代家族・脱近代家族への移り変わりをみる尺度として、松本の家解体の図式にあらわされた家制度の特徴と、落合の日本の近代家族の特徴を参考にした。家制度の特徴は、家の永続性（家の観念）・家長権・先祖祭祀・生活保障・家業・家産の6つである。近代家族の特徴には、落合が挙げる8つのうち、核家族を除く、家内領域と公共領域の分離・家族構成員相互の強い情緒的關係・子ども中心主義・男は公共領域女は家内領域という性別分業・家族の集団性の強化・社交の衰退とプライバシーの成立・非親族の排除、の7つの特徴を使用することとする。

### (2) 分析の具体的手続き

まず、聞き取り調査で得た被調査者二人のライフヒストリーを時系列順に並べ、出来事を抜き出して年表を作成した。次に、家制度・近代家族・脱近代家族への変化の時期を明らかにするために、年表中の出来事を先述の家制度と近代家族の特徴と対応させ、ライフヒストリーの整理を行った。このようにライフヒストリー中の出来事と、家制度と近代家族の特徴の対応年表を作ることで、家族の変化と食卓の変化の時間的關係が明らかになるはずである。

## 4 ライフヒストリー

本章では、上田晃道と上田紀美子のライフヒストリーを時系列に沿って紹介する。ここでは、枚数に合わせた取捨、読みやすさのための順序の変更、背景の補足説明、最小限の解釈のほかは、なるべく手を加えていない。語りには「」をつけ、語りの中で補足の必要があった場合には、( )を使用している。説明等は「」をつけない部分で行っている。

### 4.1 上田晃道のライフヒストリー

#### (1) 生い立ち

「おじいちゃんは、昭和4年、1929年に生まれました。そのときようだいは、上に姉が3人、上に兄が1人。兄は昭和2年(1927年)の早生まれだから、学年は3つ違います。それから、妹が1人。だから、6人きょうだいでした。6人きょうだいの下から二番

目。その時は、おじいちゃんは次男坊だから、とってもやんちゃだったそうです。記憶はないけど。いつも暴れとったらしい。人が、お客さんが来ると暴れるんやと。兄貴はしっかりしとった。長男やしね。」

「子どもの頃はお寺で、尼さんの学校しとったの。4月から7月までの。そうゆう学校。おじいちゃんのお父さんが教えとったの。おじいちゃんが小学校行く前ぐらいにも30人ぐらいおった。可愛がってもらったの。尼さんの学校しとった時ね。台所で、長い飯台おいてここで(尼さん)みんな食べとったの。おじいちゃんらは別に食べとったけど。ここで、(指差しながら)狭い部屋やったけど。寺の行事なんかの時、広間で食べとった。」

当時の上田家には、尼僧学園に通う尼さんや檀家が頻繁に出入りしていた。また、風呂や電話のない家も多かったことから、寺の風呂や電話を借りに来るなど、人の出入りは絶えなかったようである。

## (2) 父親の他界

「お父さんが亡くなったのは、昭和11年(1936年)10月5日。お父さんは数え年で53歳でした。おじいちゃんは、小学校1年生。1年生の時にお父さんが亡くなったの。お葬式の日、昔の家の階段の下の小さい部屋で、居たことを少し覚えています。葬式の思い出はありません。お父さんの思い出はあまり残っていないけど、亡くなる5年くらい前に病気になって体が不自由で、よちよち歩きで、まだ小さい、小学校に行っていないおじいちゃんの手を引いて、茶屋町の通りまで、10銭ほどのお金を持って、お菓子を買いに連れて行ってくれました。10銭で金つば2つほど買えたんよ。」

## (3) 父親他界後の家の様子

「小学校1年で、お父さんが亡くなってからは、安住さん(尼僧の別名)がお参りしたね。だから、おじいちゃんも、兄ちゃんも、二人で小学校の頃から衣着てました。衣着てついてまわってね。あの時、年頭いうてね、今でもお礼配るでしょ。あれ伏木の方からみんな配ってたの。檀家のお父さんがついてくれてね。長持ちかついで礼配った。そこに、おじいちゃんちっちゃん衣着て、一緒についていったの。そんなの覚えとるよ。歩いてだよ。その頃バスも何にもないもん。普段のお参りにはあんまり(行かなかった)安住さんが参ってた。その代わり、お寺なんかで、伊勢路の尼寺なんかの時(法事)にはね、安住さんが来てくれ来てくれ言うから、小さい衣着て、行ったの覚えとる。夏のお盆の法事なんかに来てくれ言うて、おぼっちゃん来てください言われるから、兄貴と二人で行ったらね、回り行(回りながらお経を読むこと)で、ぐるぐる回るでしょう。ちっちゃん時おじ

いちゃん、小学校2、3年ぐらいかなあ。(前の人を)追い越していくの。ぱぱと。走って。そんなの覚えとるよ。そうゆう時だったな。」

「高野山の伊藤おじさんが、名前だけ、住職として。寺に住職で名前だけはいるでしょ。それでも、夏休みぐらいお参りに来てた。死んだおばあちゃんがね、お葬式あるでしょ。だけど誰もいないでしょ。住職。そやからもう、歩いて、他のお寺さんにね。葬式できたんでお願いします。言うて代わりしてもらったの。」

寺では、住職が不在の場合その家族が寺に住み続けることはできない。住職が不在になった場合は本山が選んだ新しい住職が寺を引き継ぐことになる。そのため、晃道の姉の夫である、伊藤おじさんに住職としての名前だけを借りていたのである。普段の檀家へのお参りは安住さんが行っていたが、葬式の際には他の寺へ、代わりを頼んでいた。

#### (4) 幼少時代の食事風景

「あの時分ね、お参りあるでしょ、で行ったら、(檀家の家の人)が御飯食べる時間になったの。そしたら、ごはん食べさせてくれたの。お昼とか。そしたら、箱の御膳よ。ふた開いたらこうやって御膳になるでしょ。そこらへんの、(近所の人)みんな、箱膳いうてね、その中に自分の茶碗とお汁椀と小皿二つと、箸と入っとるわけ。そして自分でみんな洗って、洗ういうてもじゃーと自分でお茶でゆすいで。ゆすいだ後のお茶自分で飲んで。また蓋かぶせて、置いて。御飯食べるときみんな、子どもも自分で出して。おじいちゃんらにはちゃんとお客さん用のが出た。ご飯とお汁と漬物となんかが。家では、台所の板の間の隅にチャブ台おいて。ござ敷いて順番に座って食べてた。箱膳じゃなくて。昔はそう(箱膳)やったんやろうけど。」

1930年代、上田家の近隣の家々では、箱膳を使用することが多かったようである。しかし、上田家では、晃道が生まれる以前からすでにチャブ台を使用した食事が行われていた。その時期は定かではない。食事を行う部屋は台所の隣にあった6畳間で、台所側が下座、その向かいが上座である。席順は、上座から、兄・晃道・母・(安住さん)・姉・妹の順であり、食事は個人別の器に盛られていた。父親は晃道が物心ついた時には亡くなっていたため、一緒に食事をした記憶などは残っていないという。

#### (5) 小学校時代

「小学校は小杉尋常高等小学校という名前でした。6年生になった時に、小杉国民学校というのに変わりました。小学校をずーと行って。その頃は小学校6年生から旧制中学校の受験がありました。おじいちゃんの時ね、6年生男70人おったんだ。上級学校に進学し

たの、17人。そんな時代やったの。あとみんな高等科へいったわけ。そんな時代やからね。それで、おじいちゃんは旧制の高岡中学へ入りました。入学試験はあの年からちょうど、小学校6年生のときに大東亜戦争の真珠湾の攻撃がありました。だから、昔の小学校の廊下のスピーカーから、戦争の状況をいつも1日中聞いていた思い出があります。中学に入るときには、3日間、口頭試問だけの試験でした。筆記試験ありませんでした。3日目の最後の日に、校長先生の所へ行って、面接試験がありました。その時に、戦争がものすごいひどくなってたから、校長先生の好きな言葉に、『捨て身になってがんばります』という言葉がありました。それが、高岡中学の校訓の中に入れられたことを兄さんから聞いて、私は校長先生の前で、『私は次男坊だから、将来、兵隊さんになって国のために捨て身になってがんばります』といいました。そしたら一発で合格しました。」

金銭的には生活は決して楽ではなかったようだが、きょうだい全員が上級学校を卒業している。上記の語りからも分かるように、晃道は幼い頃から次男であるという自覚が強かったようである。

#### (6) 中学時代

「中学入って、本当に、中学校の授業を受けたのは、1年生の時だけ。戦争がひどくなって、1年の時に英語でも、グラマー、文法、リーダー、読むやつと、それから漢文とか古文とかみんな。一年生の時だけはまともに、授業を受けた。2年になったら、昭和17、8年(1942、3年)でしょ。戦争がますますひどくなった時やから、もう通年動員言うてね、他の会社とかに手伝いに行くの。運送会社とかね。だから、2年生のときはたまにしか授業してなかった。」

#### (7) 予科練時代

「3年になった時に、3年の昭和19年(1944年)だ、3年の6月に。あれ割り当てあったんだろうな。高岡中学へ、予科練に志望する者(募集した)。そしたら、おじいちゃん次男坊でしょ。兄貴には、兄貴死んだら困るから、戦争で。次男坊やったら死んでもいいでしょ。男一人残っとるから。それで、あの、無理やりよりも自分で行く言うたんかな。で予科練を志願したの。3年生の7月。まだ15歳なってない。」

「おじいちゃんの場合は、鳥取県の今の鳥取空港の近く。その海軍航空隊で二次試験あったの。二次試験あってすぐ、受かった者は入隊。おじいちゃんらの同級生らは、みんなそうゆう通年動員で飛行場行っとる者からいっぱいいるわけだ。だから、休みないしね。おじいちゃん行くときに小杉の駅前で、その(軍事工場に動員されて)寺で泊ってた10

人ほどの人だけが、日の丸持って、送ってくれた。」

「それで、予科連で6月からだから、10ヶ月たった時にね、その中でね、特攻隊志望する者手を挙げろ言われた。(特攻隊に志願し)それから、島根県行った。島根県何しに行ったか言うと、飛行場作るのに、人手が足りなかった。毎日土方。島根県の小学校で泊まって。毎日土方。土方して。だから、戦争負けた時は、島根県の飛行場におった。」

「(富山に)帰ってきたのはね、8月の終わりやった。8月の終わりに。それまでね。戦争負けた8月15日に、山の中で、天皇陛下の放送聞いてた。次の日に、みんな武装解除言うて、鉄砲やピストル持っとる者はみんな集められた。」

「戦争負けて、17日ぐらい、体育館に食べ物いっぱいあったの。おじいちゃんら特攻隊やから。一人、ビール1箱づつ。お前らこれで一生涯、サイパンかグアムが行って、一生涯重労働だわ。言うてお別れだから。言うて、15歳何ヶ月でしょ。それなのにビール1箱づつくれた。そしたら、みんなやけくそで、飲んでのか、こぼしたのかしらんけどね、みんな酔っ払って。寝込んでしまったことあったけど。それから、後片付けして、8月の25、6日ごろ、もう帰っていい。そして、自分のリュックサックみたいのに。途中で食べ物もないだろうから言うて、海軍の乾パンと米二升くれたの。それ担いで、それから自分の洋服。で、京都へ来たらね、北陸線なんかないわけだ。けどとにかく、貨物とか乗って。屋根のない貨物よ。あれのって月眺めてきた。そしたら、信子姉さんがね、(富山の)駅の前の会社に勤めとったんや。その会社に勤めとるの知ってたからね、そこへ来て。いつ帰るとか、電話もないし言えないでしょ。無蓋車に乗ってきたから、蒸気機関車でしょ。顔真っ黒けやったらしいわ。」

ここでも晃道は、次男であるという理由で、自分は死んでもいいと特攻隊にまで志願している。当時の家制度における長子相続の家長権の意識の強さが見うけられる場面である。特攻隊に志願したものの、戦争は終わり、晃道は間一髪所で難を逃れる。他の部隊所属だった何人かは、終戦直前に人間魚雷として死んでいったという。

### (8) 兄の他界

「兄貴が死んだのは6月15日。昭和20年(1945年)のね。兄貴はね2月5日生まれでしょ。20歳になったら、兵隊検査受けんなんの。みんな男は。軍隊、学生であろうとなんだろうと軍隊引っ張られた。そしたら、家の兄貴は2月生まれだから、まだ20歳なくて大学に残ったわけ。残ったために、通年動員にいて、そこで空襲に合って死んだ。それが6月15日。もう2ヶ月早く戦争終わっとれば死なずにすんだの。」

「おじいちゃんが兵隊にいった間。死んだちゅう電報もらった。小杉の町長から電報もらった。何で来たいうたら、家に男いないでしょ。兄貴が戸主でね。昔は、女戸主になれなかったの。男が子どもでも戸主になったの。で、『戸主死んだ返してくれ』言うて、町長がうちの隊長の所へ電報打ってくれたの。そしたら、返してくれた。1週間だけ。おじいちゃん1週間帰ってきたんだよ。6月の20日前後やったかな。帰ってきて、兄貴の葬式して、そしたら、信子姉さんが和歌山まで、お骨取りに行った。やっと帰ってきて、家で葬式6月の20日か、もっと後か。それが、未だに覚ええないのね。葬式の前の晩のことは知ってる。前の晩にね、おじいちゃんと同級生たちがね、今度はお前の死ぬ番だから言うてね。酒飲んでしたの覚えとるんやけど。兄貴の葬式の日のごことは一つも覚ええない。不思議。本当に不思議だ。未だに覚ええない。」

普段はどのような理由でも隊を離れることは出来なかったにもかかわらず、兄が死んだ時に晃道は1週間だけ、実家に帰っている。戸主が亡くなるというのは、それほど家の一大事だったのである。

「その時(葬式の)、おばあちゃんが伊藤のおじさんに、『次はこの子(晃道が死ぬ)の番だから、どうか富山に帰ってきて寺ついでくれ』て頼んでよ。でもおじさんは、『まだ死ぬて決まったわけじゃないんだから、もう少し待ちましょう』て言ってくれたの。」

晃道の母が心配したのは、家の跡継ぎのことだった。もちろん、兄の死を悲しんではいたが、晃道が死んでいないうちから、伊藤おじさんに後のことを頼んでいることから、家の存続を第一に考えていた様子がわかる。

### (9) 高野山時代

「中学3年と4年の1学期、軍隊に行っとった。夏休み終わって、9月から、また中学へ戻った。それで、中学帰ってきてから、おじいちゃんも、4年(の時に試験を受けて)から高野山大学入ったのは昭和21年(1946年)の4月。旧制大学の1番最後の年。大学では色々あったけども、ほら、高野山のおじさんもあったからね、なんとか卒業できた。高野山で、天徳院(姉の嫁ぎ先)に下宿して。下宿ていうより、天徳院から、月謝からみんな出してもらったの。そのかわり、お客さんの手伝いした。お膳運んだり、手伝いして。昔の学生はみんなそうやったの。間借りして。天徳院にも何人もあった。一緒の部屋で。今でも、高野山行ったら、学生おるでしょ。そんな生活をしてたわけ。そしたら、大学のごとき、高野山食べ物ないの。配給制度やった。配給は一人、3日分しか米ないの。後はアメリカからきたメリケン粉。メリケン粉にサツマイモとかジャガイモとかそんなんばっか



り、袋に入れて、おじいちゃん学生だから、天徳院のみんなのぶん配給所にもらいに行ったの。だから、すいとんとか、そんなのばかり、食べとった。だから、食べるものないから、6月1日から夏休み。みんな家行って食べて来いって。休みは富山帰ってきて、遊んどったわ。」

軍隊生活を終えた晃道は、富山の学校に戻ってすぐに、高野山大学の試験をうけ、翌年の1946年に高野山での生活を始める。姉の嫁ぎ先である高野山の寺院の天徳院に下宿し、他の下宿の学生と同じように寺の仕事を手伝いながら大学に通った。晃道は、この高野山での生活中に、僧としての修行も行っていた。

#### **(10) 住職と教師のかけもち生活**

「おじいちゃんは昭和26年(1951年)の9月卒業。卒業して帰ってきてここ(蓮王寺)の住職になった。学校の先生するつもりなかったの。寺の仕事しようと思って。でも寺の仕事もあんまりないしね。そしたら、(昭和)27年(1952年)にね、おじいちゃんの小学校の4、5、6と担任してもらった先生が、有名な人だったの。作道の中学で先生しとったの。そこで国語の先生1人足りなくなったの。それで、おじいちゃんに声かかったわけ。免許あるし。そんなら、言うてしたわけ。昭和27年(1952年)の7月1日から。」

「7月1日から勤めたでしょ。6月30日に、檀家さん亡くなって。1日の日新任式や。親任式の日は授業持たんわな。2日の日から授業始まるのに、葬式で休ませてくれって言うの、本当に嫌かった。だから、忘れられんの。だから、休まないで1時間目授業して、次の授業昼からにしてください。とかいってやってた。ずーとそんなこと28年も続けた。先生の給料は全部家に入れて。お寺の収入だけじゃ無理やったよ(生活が)。」

高野山で、僧となる修行を終えていた晃道は、富山に帰ってすぐに住職となる。しかし、寺の仕事だけでは生活は苦しく、恩師からの誘いを受けて教師と住職の二束草鞋の生活が始まる。

#### **(11) 寺の改装と幼稚園経営の開始**

「大仏さん置いてあった土倉をね。直そう思ってお金貯めとったんやけど、貯まらんのや。檀家さん少ないから。その時にちょうど、葵さんの法事があって、そんな話したら、よし、おれが建ててやろう。て、それで全部壊したの。一つ残らず壊したの。お金全部出して。幼稚園も建てて。その時に葵さんがね、あの人も自分で商売してる、商売人でしょ。これから、立派なお寺に建て替えても、お寺の経営は大変なんだ。だから、お寺で何か事業をやらなくちゃいけない。だけど、お寺がホテルやるわけにはいかないだろう

と。だから、お寺にふさわしい仕事は幼稚園だと。幼稚園やりなさい言うたの。それで幼稚園も建ててくれたの。」

檀家の1人で実業家でもあった葵作蔵氏の申し出によって、寺の立替が決定する。と同時に、幼稚園の経営も勧められた。建て替えの内容に関しても、幼稚園の経営の方法に関しても、葵氏は口を出すことはなく、全て任せられたという。幼稚園は当時の本堂の敷地を半分使って建てられた。

「それで幼稚園の資格いるから、その年に、(昭和)40年(1965年)に雅裕連れて、大阪の難波短大へおばあちゃん幼稚園の免許取りに。スクーリング2年間行った。夏休みに。(寺の)落成式が(昭和)41年(1966年)の8月にやったの。お寺の落成式の大法事やったの。その前の日まで、雅裕と、おばあちゃんと大阪へスクーリングに行っとったの。」

「工事に1年半ぐらいかな。その間、昔下宿に使ってた部屋の建物に住んどったの。台所も何にもなかったから、仮の台所でやっとった。その建物をユースにも使ったの。改装して。ユースもね、多いときで3、40人泊まったんよ。すぐやめたけどね。」

ユースホステルは、幼稚園を始めた後に、これも社会奉仕だからと人から勧められ始めた。しかし、幼稚園が思った以上に好調で、忙しくなったことから、3年で廃止している。

「改装は、おじいちゃんと、設計士と、こうしようああしよう言うて。そしたら、お金が足りなかったの。そしたら、本堂の中身は自分でやりなさい、檀家がいるんだからと言われて、お金集めたの。改装し終わったときは、今の寺の台所の所しかなかった。でそこで食べとった。テーブルとイス置いて。あれだけしかなかったの(台所が)。みんなで。向かいの和室は居間。あこにコタツして、いろりと。」

工事の間1年半の仮住まいの時から、台所にテーブルを置いて食事をするようになっており、改装後も仮住まいの形がそのまま引き継がれた。

「檀家さんとかの前では上座やけどね。どこ行っても。けど別に上あっても下であってもこだわらない。こだわる人も居るけどね。どうでもいいんよ。テーブルでもなんでも。イスの方が足も楽やし。忙しかったし。」

改装後も食事を別の部屋で取ろうと思えば十分可能な部屋数であったが、台所以外の部屋へ食事を運んで食べるという考えはなかったようである。また、晁道は高野山の下宿時代、天徳院の食堂で他の下宿人とともにテーブルで食事をする生活を送っており、テーブルとイスでの食事にも抵抗はなかったという。

## (12) 幼稚園経営開始後の生活

「幼稚園始めてから忙しかった。幼稚園から給料一銭も貰わずに、おばあちゃんも。おばあちゃんに給料やりはじめたのは、(昭和)55年(1980年)からしかやってない。可哀想やった。」

1980年に第二幼稚園が開園し、紀美子が園長になるまで給料は出していなかった。会計もバスの運転も全て、夫婦二人が中心となって行っていたが、書類上、紀美子は晃道の扶養家族だったのである。

「家の仕事あるし、幼稚園の仕事もできたし、定時制高校に移らせてもらったの。で定時制で5時からでしょ。授業6時からでしょ。昼間、幼稚園のバス運転して。帰りも(バスで)送って行って。終わったらすぐ学校走って行った。そんなこと13年続けた。やから、5時に学校行って、夕飯は5時半ごろ学校で給食食べて。おじいちゃん以外のみんなで、夕飯食べたの。朝と昼は一緒やけど、だから、夜、土曜ぐらい本当に行くの嫌やった。みんな土曜日の休みで、土曜日だから何か美味しいもの食べようか言うときに学校に勤めにいかな。」

「それから最後は高岡の高校2年間。転勤で。嫌だいつとったのにね、かわらされた。そしたら、中間定時制いうて、仕事しとる子なんかは昼くるわけ、仕事の合間に。そしたら、中間の先生と夜間の先生おったの。こっちは夜間の先生やけど。早よ出てかんなんの。交代の関係とかで、職員会議なんかは1時からやったりしとったの。そしたら、都合悪いの。それでもうやめちゃった。その時もう、50になってたしね。28年先生しとったの。」

「やめてからは、お寺の仕事と、幼稚園。そやから、定時制勤めたときから、幼稚園協会の理事とか幹事とか全部してた。だから、勲章くれたの。昭和43年くらいから幼稚園協会の役職してたの。学校に勤めながら。」

幼稚園経営を始めて、晃道は住職と教師、幼稚園理事長、幼稚園協会役員、ライオンズクラブ役員など、幼稚園経営を始める前と比べて、社会活動も活発になっていった。

## (13) 二度目の改装

「二度目の改装は、おばあちゃんが言い出した。そして容子さんとおばあちゃんですぐ使いやすいようにしてもらったの。おじいちゃんも設計は考えたけどね。」

「前の自分らの部屋がね、前の部屋やったら、襖に鍵掛けとったの。檀家の人らきたらね、『ここほんげはんら(住職夫婦のこと)の部屋やって、ちょっこ見んまいけ。』て、ベットおいてあるのに開けにかかったの。だからあこに(襖に)鍵付けたの。そんなんやっ

たから。変えよう言うたの。それまでは、あっちの台所で食べてたわ。」

当時紀美子・晃道夫婦は応接室の隣の6畳間を寝室としていた。その部屋は、玄関からも近く、住職夫婦の部屋を見てもよとする檀家の人には絶えなかったという。檀家の人々にとって、寺は公共の場であり、どここの部屋でも気兼ねなく入れるものだった。家族のプライベートの場所というものは、寺の中においては皆無に等しかったのである。

## 4.2 上田紀美子のライフヒストリー

### (1) 生い立ち

「おばあちゃんは、昭和8年(1933年)1月に生まれました。生まれたときは、お父さんが男の子を欲しかったもんだから、男の子や思ったんやて。おじいちゃんが、おばあちゃんがお風呂入とんのをみて、『あれ、この子女の子やないか』いうたのそして慌ててどうしようてなったんやけど、ちょうど紀元節のめでたいときやったから、紀元に生まれた紀元の子で『きみこ』てきげんに生まれた美しい子、最も美しい子になるようにって。それがおばあちゃんて、6人兄弟の上から2番目。女3人男3人の6人兄弟の2番目やったの。上のお姉ちゃんはしっかりして賢いし、下の妹はやんちゃで、あれで、真ん中に挟まれて。」

### (2) 幼少時代

「高野山の山に予科練が入ったの予科練ちゃ少年兵、兵隊さんが。山全体のお寺がみんな開放して、予科練の練習場になったわけ。でも上手いこと、おばあちゃんのお寺は、2つに廊下で隔てて、大きく二つになってて、高野で一番大きなお寺だったんで半分を酒穂ていうて、酒の穂て書くの。食料品の貯蔵庫の入った建物に使ったわけ。そしてその、もう一つのお寺の方でおばあちゃんたちはおったわけ。」

「そのときは、もう全部のお寺が兵隊さんでもう一杯だったので、偉い人、宮様とか、そういう立派な人がみえた時は、おばあちゃんのお寺で泊まったわけ。そこでおばあちゃん育ったおかげで、まあ皆ほどに食べ物には不自由しなかったの。」

紀美子の実家の寺は、高野山でも1、2を争う立派な寺だった。富山の晃道の寺とは違い、寺の仕事だけで、十分に食べていける、裕福な家庭だった。

「おばあちゃんら女3人やろ、ほいで男の子、一番上のお兄ちゃんがね山水飲んで赤痢になったら、その頃ええ薬なくて一晩で死んでしもたの。おばあちゃんが、泣いて泣いてね。ほいで今のおじちゃんは、2番目次男坊なの。女の子3人が上やったから。ほいたら、しょう子おばちゃんは(姉)体弱かったの。おばあちゃん(紀美子)強かったの。ひろこおばちゃん(妹)はもう、我俣やったの。」

### (3) 女学校時代

「そして今度、女学校行ったときにね、普賢院のおばちゃんは、1番上やったし、しょうこおばちゃん頭良かったの、ほいで、一番綺麗やったの。橋本の女学校一番で入ったの。ほいでずっと級長でいったの。その頃、高野山にもあったんよ（女学校が）せやけど、おじいちゃんが、苦労しても橋本行かなあかん言うて橋本へ入ったの。あのときにね、10人受けて3人入ったんか。そいで、おばあちゃんも、良い成績で入ったの。ほいたら、担任の先生がね、『あなた、お姉さんより成績悪いですね』て、それぐらいお姉ちゃん偉かったの。」

幼いときから、紀美子は出来のよい姉と比べられることが多かった。下の妹も要領がよく、家の仕事は紀美子ばかりがしていたという。

### (4) 高等学校時代

「あのころまだ戦争やったしな。柿木の根元の草引きに。大きい人は学徒動員で工場に働きに行くし、おばあちゃんらは、その柿の木もとの草引いて、労働のてったいに行くの。勉強よりそれや。そのうちに、あの学校、戦争あかんかったやろ。学校、学区制になったの。高等学校の橋本いっとった子は高野山高校へ。決まっとったの。一つ上のしょうこおばちゃんのときまでは、残っても良かったの。橋本へ。そやけど、おばあちゃんからは高野山に変わらされたの。そいで、高野山の高等学校行ったの。その時に、ここのお父さんが（晃道）大学でサッカーしとったらしい。そやけど知らんの。」

紀美子が高校時代に、晃道は高野山大学に通っていた。紀美子の父と晃道が下宿していた天徳院の住職（晃道の義理の兄）は仲がよかった。そのため、晃道は天徳院の用事で赤松院によく出入りしていたという。

「高等学校でも男の子ばかりのそこへおばあちゃんら変わって来たから、女の子7人しか居れへんだ。7人のなかで1番やった。案外ね、一生懸命勉強したし、おじいちゃんがうるさかったし。」

### (5) 子どもの頃の生活

「しょうこおばちゃんはよう出来るし綺麗やし、ひろこおばちゃんはまたかわいらしいし、おばあちゃんが一番みっともなかったの。おばあちゃん、そばかす多かったの。ほんで、顔にいっぱいおひさん当たったら、そばかす出るの。ほいたら、三島のおばあちゃん言うて、赤松院（紀美子の実家）のおばあちゃんのお母さん（曾祖母）のお家ね。『紀美子成績どうや。頭にしらみわいてないか』てあの頃不潔やから。皆しらみうつってね。『おま

えはなんでこんなに一番みっともないんやろな。姉ちゃんでも、ひろちゃんでもかわいらしのに』て言われて。そいて、縁側で悲して泣いっとったの。そしたら、おじいちゃんが来てね。人間はね見えるところが綺麗でもあかんのやと。この見えない所を綺麗にしとったら、自慢できて人に恥ずかしいんやから、お前は顔がみっともない言うても、見えない心を綺麗にしなさい。と。そうすれば幸せになれるんやからて、言われたの。それから、おばあちゃんもう一生懸命ね、あの、言われたこと聞いて、人に優しいせなあかん思て、あの頃今の韓国の子がかわいそうな子いっぱい居ったの。そんな子にそうっと何かあげたりね。」

「朝、おばあちゃんら小学校行くまでに、女の子3人はその、汚い所掃除せい。言われて。冬でも便所掃除、お便所でもいっぱいあるやろ。高野の寺。何箇所もあるその便所全部掃除して行かんなんの。20人居ったの従業員の人が。おばさんやら。やってくれる人いるけどおばあちゃんらせいと。何でかいうたら、女の子は嫁に行かんなんと。その時に、今の生活よりいいところ行けば幸せやけども、今の生活よりも悪いところ行った時にすごく困らんなん。と。せやから、ここで苦勞しとけば必ずプラスになるから。そして、あの広い廊下。昔やからみな、雑巾がけ、あれ拭いてからやないと学校やらしてもらえへん。」

紀美子の実家である天徳院は寺であると同時に参拝客を泊める宿坊であった。そのため、宿坊で働く人間が多く家の中にはいたのである。

紀美子の父は子どもたちに厳しい人だったという。生活に何不自由することも無い、裕福な家庭だったにも関わらず、紀美子たちは従業員と一緒に同じ食事をし、寺の仕事も多くこなしていた。紀美子たちには厳しい父親であったが、従業員や寺を頼る人々には分け隔てなく接し、信頼が厚かったという。

## (6) 幼少時代の食卓

「お昼ご飯はね、小粥さんやしてまだあの頃はみな。紀州の小粥さんてみな茶粥。もう、目が映りそうにしゃぶしゃぶのお粥。米が少ないんよ。皆、他のお寺の奥さん皆、いい物食べとる時でも、おじいちゃんは従業員とおんなし物を食べんとあかん。て言われてね。ほいで、私らみんな台所でおばさんらと一緒に食べとったの。ほいたら、お弁当持って行けれへんのよ。学校に。食べに帰って来いちゃうの。1時間の間に学校から、走って帰って来んなんの。だーと走って帰ってってそのお粥をしゃーとすすって、また走って行ったらちょうど学校のベルがリーーンと鳴る時。」

紀美子の父も従業員と一緒に食事をとっていた。人間は心のあり方で価値が決まる。と

というのが口癖で、上座下座のような席順も全く気にしていなかったという。

### (7) 結婚

「赤松院のおじいちゃんは、一番上の女の子は、高野山に嫁がすと。二番目の子は、高野山から2・3時間離れたところに行かすと。3番目の子は遠いところに行かすと。それを決めてあるて言うたんやして。おばあちゃんの番になったやない。ほいたら、おばあちゃんが富山になったんやして。あの時、天徳院のおばちゃん(晃道の姉)が、ここは、富山でもね。富山というところは、20件も檀家があったら、ゆっくりと食べていけるとこやと。いいところやからて言うて。」

「おばあちゃんはここへ(上田家へ)来たわけ。お見合い結婚で。ほいたら、おじいちゃんは、その時に、弘子おばちゃんは赤松院に(晃道が)布団借りに行ったりしたら、怒られとったから、よくしとったんやと。けど、おばあちゃんは、奥で仕事ばかりしとるさかい、(晃道が)居るて一つも知らなんだ。そやけど、まあご縁があって。来てんやけど。富山では一番大きなお寺やし、女中さんつけてくれると。そんな結構なことないちゅうて。そして、あのおばあちゃんだけが、11月に結婚したけど、8月にいっぺん天徳院のおばちゃん(晃道の姉)と一緒に来たの。来てみたら大きな寺で、大きな寺やけど古い寺で、大きいにも色々あるわな。あそこも直さな、ここも直さな、ちゅうとこやったわよ。やけど、まあご縁あったやし、あの頃はおじいちゃんかてもっとかっこもよかったし、今と違ごて。」

「富山で、水道があって、電話があると。そやさかいに、行っても生活できる言うて。おばあちゃんも呑気やからさ、親が行けいうもの。小さいときから何でもつらい事あったら、全部おばあちゃんやとったからさ。嫌ちゅうことちゃよう言わんの。」

紀美子の姉は、父親の言うことは聞かず恋愛結婚で高野山の寺に嫁いだが、紀美子は両親の言うままに見合いをして結婚している。

### (8) 嫁入り時代

「おじいちゃん一人っ子やない、男の子で。後、皆女で。小姑さん何人おった?天徳院のおばちゃん、横浜のおばちゃん、竹内のおばちゃん、すみこおばちゃん、か、4人おったんか。とおじいちゃんやとって。しょうぞう兄さんちゅうのが死んどるの。ておじいちゃんが次男坊やさかい。おばあちゃんも(晃道の母)苦労しとるの。そこへ安住さんおったの。安住さん厳しかったの。昔からおった人やったから。おばあちゃんの姑さんみたいな人やったの。おばあちゃんがな長いこと、高野山行つとる時でもここ(寺)守ってくれ

とった人やったから。」

紀美子の嫁入り当初、寺の中は義母が取り仕切り、会計は義姉が管理していたが、檀家のお参りなど、外での仕事は寺に住み込みで働いていた安住さんが行っていたため、義母は安住さんの言うことには逆らえなかったようである。

「入り口でも、旦那さんは正面玄関からやけど、奥さんは内玄関から入れとか。そういうのが昔のしきたりやから、仕方なかったの。座る席でも、旦那さんの席から順番。小姑さんの方が、お嫁さんより、偉いんや。お客さんに何かもの聞かれても、今は住職がいないんで分かりません。て言っとった。勝手に答えるわけにいかんかったの。」

「こんなひどいんやったら、雅裕連れて帰ろうかな。て、ここで居たらね。風で、『こすぎーこすぎー』て。風で聞こえるの。あれに乗ったら帰れんねん、雅裕背中に背負って帰ろうかなて思たことあったけど、帰ってもしゃーないやろ。辛抱せな辛抱せな思て。そして愚痴言いたかったけどね。友達一人もおれへんやして。おばちゃんらは、外行って、おかあさんの事はもうみんな褒めて言うてるわけ。いい嫁さんやて。おばあちゃんのこと。言うてるらしいの。それに私がそんな愚痴言うたら、かえって悪いし、そして、人からも笑われんなんやして、だあれも連れ居れへんからさ。おばちゃんら言うてることは本当で、おばあちゃん言うてるのが嘘みたいに聞こえるやして。」

「おばあちゃんは（晃道の母）ね。また、絶対愚痴言わん人やったの。そして、他所へでもね、紀美子さんようしてくれる。言うて、おかあさんええ人やったんやけどね。おばちゃんは、難しかった。おばちゃんは、あきおちゃんが、3つの時に旦那さん肺結核で死んだの。そして、家連れてきて、家でしてんけども（暮らしたんだけれど）、おばちゃんが働いとるさかいに、おばあちゃんがあきおちゃんを親代わりに見たわけ。おばあちゃんが嫁に来たときは、あきおちゃん六つやったの。で勉強もみんなみて、洋服も。」

紀美子の義理の姉にあたる、信子は夫を亡くしてから、上田家に戻り、図書館に勤めながら生活をしてきた。勤めているとはいっても、給料を家の会計に入れるわけではなく、生活費は全て、寺の収入と、晃道の教師の給料でまかっていた。

### **(9) 息子の誕生**

「お腹大きい時に、狭い茶の間の6畳の部屋に、いっぱいおばあちゃんが、女優さんの写真貼って。これをみて食べなさいよ。そしたら、お腹の子が綺麗な子が出来るから。てそれ見ながら、食べたんやして。」

「雅裕生まれたやろ。そしたら、小学校行って、やっとこれで雅裕通じて友達出来る。」



思て喜んでいたら、あの頃 PTA 役員てのは、家に手紙持ってって、適当な人に丸をつけてください。て。高寺で適当な人言うたら、母さんしか、あの頃子どもいっぱいやったから、この辺も。まるつけるの分かつて。そしたらおばちゃんが、『紀美子さんきっと丸つけられるから、私先生の所へ頼んできたで。』ちゅうて。まるつけんように。て。丸ないようにしてくれ。て。そうせんと、役したら、寺の仕事できんようになる。て。」

「あきおちゃんが、賽銭取ったことあんねん。小さいときに。そしたとき、お父さん、あきおちゃん怒ったの。そしたら、(信子が)あきお怒った言うてね。もう気違いみたいになってね、怒ったの。大事な一人息子やのに。て、あきお、あきお、あきお。てねすごかったから。おばあちゃんこれ見て。ああこれは、嫁さんもろうた時に、あの嫁姑問題あらして、その時に困らんように。小学校行つとる間までは、雅裕の世話するけども、中学入ったら、ほっぽろう思たのよ。けど、小学校の時も何にもできへんかった。あの、いっぺんだけ、小学校の学芸会行った。それで終わり。」

「のぶこ姉さんが、『おばあちゃんが行けれへんだんや。それなのに、紀美子さんが来て、(息子の学校行事)行ったら、お母さんが、かわいそうや』て言うんやして。」

嫁に来てから、紀美子は外へ出る機会はほとんどなかった。寺の奥さんがむやみに外へ出るものじゃないと、義母の時代から言われており、義母自身そうして暮らしてきたのである。魚や、野菜は寺へ直接売りに来たし、特別なものは、義姉が仕事帰りに買ってきた。息子の運動会なども義姉が代わりに行ったのである。

#### (10) 結婚当初の食事風景

「おじいちゃん上座で、その次おばあちゃん、その次おばちゃん、ほいであきおちゃん、雅裕・おばあちゃん。順番で。小姑さんの方が、お嫁さんより、偉いんや。コタツでも全部そう。料理は、おばちゃんが、魚料理してくれて、ふつうのちょっとした、手のこんだ料理なんかは、おばあちゃんが。でもね、はじめてシュウクリームこしらえたときに、おばあちゃん嬉しい言うて、自慢してこんなん言うて、おばあちゃんのお里まで、それ持って行ったんや。家のお嫁さん作ったんや。て。」

#### (11) 寺の改装と幼稚園経営の開始

「葵さんがね。ここへ来て。40人で法事したの。あの法事したときにね。精進料理とろう思うたら高かったの。おばあちゃん精進料理なら、出来るさかいに。家に材料て、お膳からみんなあるんやから、私する言うて、雅裕おんぶして、全部したの。色んなもんしたの。こんな美味しい精進料理初めて食べた。て、喜んでくれて。それで、この家たったの。」

お寺を寄付しようてなったの。もうぼろぼろやって。寺の人が一生懸命やっとなのやから、これからは、寺だけで食べていける場合やないと。何か仕事せなあかんから。幼稚園するちゅうことは一番、社会奉仕にも町のためにもなるし、そやさかいに。」

### (12) 短大へのスクーリング時代

「ほいで、おばあちゃんが免許持ってなかったの。幼稚園の先生の。ほいで、雅裕連れて、大阪へ通信で、行とったの。2年間大阪かよって、スクーリングに行くの。月に1週間行ったかな。ほいで、夏休みに2週間行ったの。そいで2年間行って。その時に、赤松院のマンションを使とったの。まだ雅裕が小さいさかい、連れて行ったの。幼稚園の先生やから、簡単に思っ行ったら、英語はせんなん、それから、ピアノせんなん。リトミックも、おばあちゃんは、英語もだめ、数学、あの前はしとったけども、忘れしもとるわけ。みんな。昭和40年だから、35歳の時に行ったの。そしたら、みんな忘れとるわけ。英語はそんなたいしたあれは、幼稚園の先生にあんまり関係ないから。数学がね難しかったの。そしたもう。晚いつつも、夜11時半までにきめて。次の日にまた堪えるから。そして、勉強、本とって数学の勉強して。」

「ピアノは今度弾き語りせんなんの。試験が。ピアノも何にもないし、ピアノカもないし、学校にピアノがあれば30台ほどあったけど、ちょっと暇見てはそこで練習して。その先生が、子ども連れて行とるのおばあちゃんだけやから、皆若い人行とるし、そやさかいに、『あんたよう頑張ったね』言うてね可愛がってくれたの。」

1965年に改装が始まるとすぐ、幼稚園教諭の資格を取るため大阪の難波女子短大へ通い始める。通信教育のため、学校へ通うのは月に1週間から2週間だった。

### (13) 幼稚園開始後の生活

「ほいで、幼稚園始めたの。幼稚園始めた頃は子どもおれへんでね。先生はね、おばあちゃんと、まさこおあばちゃん、森川先生ちゅう先生と、堀江先生ちゅう先生。四人。それにおじいちゃんと5人でしたの。皆で、あの、葵さんが園長先生なって。おじいちゃんまだ勤めとったから。そして、檀家のタバコ屋のじいちゃんとで、子どもの居るとこ頼んでまわって、80人。初めは20人ぐらいしか、けえへんやろうな。言うて、赤字覚悟でしたの。それが80人来て。そして、ほいで、おばあちゃん会計から全部して。給食も初めは給食センターから取とったの。」

「ほいでおばあちゃん、その時に大型免許取ったんよ。そして、大型免許取るのに、おばあちゃん、幼稚園のあの時運動場広かったから、そこで練習したの。缶おいて、缶に力

チェーンと当たったら、溝落ちたて言うことで。それでも一発で取ってきて、はじめは普通免許で、小さい車でおばあちゃんは（子ども）集めて、おじいちゃんは大い車で集め取ったんやけども、そのうちに一発でも試験受けたら大型免許取れるちゅうので。行ったら、19人受けたの。女の人おばあちゃん1人やった。」

「そのうちにやっぱり、ユース（ユース・ホステル）してくれってやったやろ。でユースもしとるさかいに大変やったんよ。幼稚園建てた時にユースしたんやけどね。その時はまだ給食センターやったから。」

幼稚園経営が始まると、幼稚園教諭、園児の送迎、会計と全てを一手に引き受ける。子どもが以前から好きだった紀美子は、全て自分からやりたいと晃道に言ったのである。幼稚園開園当初は、毎日忙しく夫婦2人で飛び回るようにして働いてたという。

「幼稚園始めた時は、おばちゃんおったんやけども、おばちゃんなかなか難しいひとやったから、そやさかいに、雅裕大きくなるときに、お嫁さん来てね。お嫁さん来てからおばちゃん出てちょうだいて言うたらさ、今度のお嫁さんきついから、追い出された言われたら大変やない。そやから、それまでに何とか解決しとかなあかん思て。家の死んだおばあちゃんまだ居るときに、出て行ってもらったの。おばあちゃんいる間に話をして、その代わり、おばちゃん退職金からみんな持って、それにお金足して、そして、あそこへ家建てたの。幼稚園してる間も、おばちゃん勤めてたからね。自動車の運転は時々してくれた。それは助かったよ。」

紀美子は義姉のことで苦労した経験から、息子が結婚する前に義姉に家を出てもらうようにした。寺はただでさえ嫁が来てくれないため、少しでも嫁を迎えやすい状況にしたかったのだという。義姉が家を出ることに関して、義母も晃道も反対しなかった。義姉の息子も成人し、家を出ても十分生活できると考えたのである。義姉は、新しく住む家の支度金を準備することで納得したという。

#### **(14) 改装後の食事風景**

「台所がもう、そこで食べるしかなかったやろ。その時はもう、席順も、上下も関係なし。お正月なんかはちゃんと（畳の）部屋でしたりしたけど。みんな忙しかったし。幼稚園始めてからも、おじいちゃん学校の先生しとったから、定時制の。夜は学校の給食やったしね。後はみんなで食べてたの。テーブルにもちゃんとしたの、テーブル式の席順とか、あったらしいけど。おばあちゃんも、おじいちゃんも、あんがいそんなん（上座・下座）気にするような性格やなかったもん。使いやすいようにしたの。」

「(改装の設計の時は)おばあちゃんも、紀美子さんの好きなようにしていい。おばちゃんは色々言ったけど、おばあちゃんが、あんたは口出したらあかん、て。言ってくれた。あんたは、この家を出て行く人なんやから。この家でやっていくのは紀美子さんやから、て。うれしかったよ。」

### (15) 給食の開始

「そしたら、3年目に給食センターが中毒起こしたの。他の幼稚園の中毒。それで、あかんてなって。保健所の指導もあって、そして給食室もしたの。ユースの場所改装して。ほいたら、今度安くせんなんやろ。どないしたら安くなるか思てね。朝早く起きて。そして、おじいちゃんの友達がね。富山にね、問屋さんあったの中央市場。その人に頼んでくれて、こんなん頭に貼ってそして、おばあちゃん毎朝、あれで5時頃からトラックに乗って中央市場まで行ってこれで。買って来て。コロッケでも、その頃やったらね、子供がね、あれで、180人程居ったわ。それおばあちゃん一人でしとった。コロッケでも全部手作りで。」

「人数、子供どんどん増えてきて、三百何人なってくるから、どうしても続かないから、給食のおばさん雇ったの。一番先に木下とくえさん一人雇ったの。そしたら、一人じゃ手足らなくて。木下はるこさんと木下れいこさんと、親戚の人同士みんな3人やったら、檀家の人やし、生活助けてあげんなんし、ちゅうので3人おいたわけ。そして、3人おいてから、おばあちゃんまで中はいってあれやし、おばあちゃんの仕事は給食から離れたの。」

子どもが増えて、給食を作る人手が足りなくなると檀家の人を雇い、給食の手配から全てを任せるようになる。雇った3人は檀家でもあったことから、寺の掃除や法事の際の準備など、これまで家族で行っていた寺の仕事も行い、現在でもそのその状態は続いている。

「子どもが360人。もう3つの幼稚園になっとるやろ。それで、おばあちゃん第三幼稚園の園長になったんやね。第三の園長になって今年で15年かな。なったけども。そやけども、その頃は若かったから、一生懸命(幼稚園に)行っとった。」

晃道のライフヒストリーにもあるように、紀美子は第3幼稚園の園長になるまでは給料は貰わず、晃道の扶養家族という扱いだった。

### (16) 姑の他界

「死ぬ時にね、おばあちゃん歩けれへんなってしもて、あの大きい人がこんだけの上にくろっと寝るようになったの。あん時にお風呂も入れれへんで、そんな時にお父さんが抱いておばあちゃん裸にして、ほいて、お父さんが先風呂入って、おばあちゃんを風呂の中へ

抱いていれて、お父さんの膝へ入れて。ほいで今度、お母さんが、洋服脱いで、二人で体洗ってあげて、それが終わりやったの。ほいたら、おばあちゃんありがとう、あるがとう。言うて。」

### (17) 息子の結婚

「雅裕は大学出て、すぐに専修学院行って（僧になるための学校）帰ってきてからは、高岡第一高校に勤めとったの。3年ちゅう約束でね。家継がんなんし。3年だけで。でも、雅裕何でも出来たさかい、辞めんといってくれ言われて結局5年かな、勤めたの。」

一人息子であった雅裕は、家を継ぐことが当然のこととして考えられていたようである。幼いころから、衣を来てお参りにもついてまわり、檀家からも寺の跡取りとして扱われていた。

「お寺ちゃんかなかお嫁さん来んさかい。言うて、しょうこちゃんに頼んだの。そしたら、いい子居ったかて、聞いたら、いいお譲ちゃんが居るからて言うて。容子さん紹介してくれたんやけども。雅裕が嫌言うたの。遠い所の人だから、会いに行けれへん。さかい。て言うて。今の時代何あほなこと言うてるの。て言うたけど。せっかく言うてくれたんやさかいに、小松空港まで迎えに行っといで、あんたがいいゆったかて、向こうが、嫌や言うかわかれへん。でも気に入って。いい子やと。綺麗やしね。あんな子と結婚したい。て言うから。」

「容子さんも賢いさかい。優しいし。PTA も行きなさい、習い事も行きなさいゆうて、そやさかい容子さん友達いっぱい居るやして。出来るだけおばあちゃん、行けるときはどこにでも行っとかれ。言うとな。おばあちゃんの二の舞さしたくないの。どっちが偉いとかもないし。昔ちゃ、お寺の奥さん言うたら、大奥さんのことね。大奥さん居らんかったら、勝手に話進めたりできんかった。今はどっちでもいいやろ。」

このときには、寺の奥さんがむやみに外に出るものではない。というような、規範はなくなっている。

「そのうちに都史佳生まれて。可愛い。可愛い。何でもしてあげたいぐらい。おじいちゃんでも喜んでよ。出産のときは生まれるまで、ずっと本堂で祈った。」

### (18) 二度目の改装

「今の台所出来たんは、（昭和）60年かな。都史佳生まれて、子ども部屋も居るし、若夫婦の部屋もちゃんとしたいし。てなって。前の部屋やったら、檀家さんとか、人がすぐ来てしまって、嫌やったんよ。そやから、今度はドアでこっち仕切ってしもて、家族以外

は入れんような造りにしたの。鍵もつけて。」

家族用のスペースは寺の一番奥の部分に、蔵を潰して作られた。入り口には鍵もつけられ、他人は勝手には入れない場所となった。

「この時ももう、居間と、台所と一緒に広くしてしまっ。お風呂もつけて。席順とかももう、適当。まあ、だいたい決まってはくるけどね。いつもの座る場所は。容子さんの使いやすいようにね。台所はして。二階の部屋も色々考えて。」

この時にはもちろん上座下座の席順も見られなくなり、今ではお正月でさえも、テーブルで普段とかわらない場所で食事を行うようになっている。上座下座の順序が見られるのは、寺の法事のような公的な場のみである。

## 5 考察

さて、2人の生い立ちから、2度目の改装に至るまでのライフヒストリーを聞き終えた。本章ではライフヒストリーから得たデータについて考察を加えていきたいと思う。

### 5.1 家族の変化

本節では、2人のライフヒストリーを一つの年表にまとめ、ライフヒストリー中の出来事と、家制度と近代家族の特徴を対応させた対応年表について述べていきたいと思う。

この年表では、結婚や家族の死、改装など、上田家にとって重要と思われる出来事、もしくは、家族を変化せるきっかけとなったと思われる出来事を抜き出したものである。右側には、家制度、近代家族の特徴を並べ、その特徴が見られる年にはマルを、特徴が見られない場合にはバツを記入した。

表1 家制度と近代化族の年表

年	出来事	家の永続性	家長権	先祖祭祀	生活保障	家産	家業	家内領域と公共領域の分離	家族成員相互の情緒的關係	子ども中心主義	男は公共領域、女は家内領域という性別分業化	家族の集約性の強化	社交の衰退とプライベーターの成立	非親族の排除
11951年以前		○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	×	×
1952年	異道教師を始める	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×
1953年		○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×
1954年	異道・紀美子 結婚	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×
1955年		○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×
1956年	雅裕誕生	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×
1957年	安住さん死去	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○
1958年	テレビ購入	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○
1959年		○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○
1960年		○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○
1961年	風呂や電話を借りに来る人がいなくなる	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○
1962年		○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○
1963年		○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○
1964年		○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○
1965年	改装①・紀美子スクーリング開始・普通免許取得・テーブルで食事を始める	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1966年	幼稚園開始・紀美子幼稚園教諭免許取得・大型免許取得	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1967年	ユースホテル開始	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1968年	信子家を出る	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1969年	ユースホテル廃止・給食開始	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1970年		○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1971年	千里他界	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1972年		○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1973年	第2あおい幼稚園開園	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1974年		○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1975年		○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1976年		○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1977年	給食室に人を雇う	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1978年		○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1979年		○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1980年	第3あおい幼稚園開園・紀美子園長になる	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1981年	息子夫婦結婚	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1982年		○	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	○
1983年	都史佳誕生	○	×	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×	○
1984年		○	×	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×	○
1985年	改装②	○	×	○	×	×	×	○	○	○	×	○	○	×

### **(1) 改装前の家族の変化**

第一の変化として、家制度の特徴である「生活保障」と「家業」の衰退が挙げられる。「生活保障」とは「家」にしがみついてもさすれば、何とか生きていけるという、「家」の機能的側面のことである。また、「家業」とは家族労働は賃金によっては評価されず、経営と家計が融合しているものをさす。

晃道が教師を始めるまで、上田家の家計は寺の収入のみで成立していた。しかし、家業の寺の収入だけで家計をさせることは難しくなったため、晃道は教師を始めたのである。晃道が教師をはじめてからは、教師の給料が上田家の家計を支えていた。寺からの収入もあったが、家族成員の生活を保障できるものではなくなっていたのである。

次に、近代家族の特徴である「非親族の排除」が挙げられる。1957年に住み込みだった安住の死によって、上田家では一旦非親族が排除されている。

### **(2) 一度目の改装における変化**

「家長権」については、一度目の改装があった1965年後に縮小もしくは消滅したと考えられる。それまで、家を代表するのは晃道だけだった。しかし、幼稚園を始めるための、園児の募集は夫婦二人で行い、幼稚園開始後も、会計や事務職などの多くを紀美子が受け持っていたことから、家長権が委譲、分限していったことがわかる。また、近代家族の特徴である「男は公共領域・女は家内領域という性別分業」も、紀美子が幼稚園経営に深く関わることによって、失われている。

「家産」についても、家業の寺の象徴である、本堂の敷地を使用して幼稚園を建てたことから、かつての家産の観念は、希薄化していることがわかる。

### **(3) 一度目の改装後の変化**

改装後の1975年に、上田家では給食室に人を雇う。幼稚園の給食作りのための要員だったが、給食室が自宅に併設されていたため、給食の仕事だけでなく、寺の仕事や、家の留守、昼ごはんの準備という家事の一部分までを担うようになった。一旦は排除された非親族が、上田家の中に再び現れたことになる。性別分業が崩れ、女性が働きだしたことで、上田家における家事労働力が不足したのである。

1982年に息子の雅裕が結婚し孫が生まれた頃から、「家族成員相互の情緒的關係」と「子ども中心主義」が見られるようになる。雅裕の幼少時代は、子どもを中心とした、愛情で結ばれた家族というよりは、寺の跡取りとしての子どもを教育する場、家を永続させるための家族であった。雅裕が結婚し、孫が生まれた時には、跡取りとしての教育を施すよう



なことは行われず、寺の仕事に関しても、子どもの自主性に任せ、手伝わせる程度であった。跡取りを育てる場から、子どもに愛情を注ぐ場に変化したのである。

#### **(4) 二度目の改装による変化**

1985年の改装によって、「家内領域と公共領域の分離」「社交の衰退とプライバシーの成立」が起こる。巻末の見取り図からも分かるように、1985年の改装後の家族の生活空間は、以前に比べて家屋の奥に位置している。また、台所も、寺用、家族用の二つに分かれており、家内領域と公共領域の分離、プライバシーの成立が見て取れる。社交に関しては、寺という性質上それほど衰退は見られないが、かつて、風呂や電話を借りに人々が入り出していた時代と比べると、衰退していると言える。

#### **(5) 変化していないもの**

二度の改装を経ても変化しないものもあった。一つ目は、「家の永続性」である。ここでの「家の永続性」とは、家は世代を超えて未来に永続すべきであるという観念のことである。上田家において「家の永続性」は、晃道が幼少時代から、二度目の改装まで、失われていない。晃道が幼少時代は、兄が家を継ぐということが周知の事であったし、兄がなくなってから、すぐに伊藤おじさんに富山に戻るよう頼んでいることから、家の存続を第一に考えていたことが分かる。また、雅裕が生まれてからも、子どもが家を継ぐのが当たり前であるという考え方に変化はなく、外へ勤めに行くことは期限付きでしか許されなかったのである。

二つ目は、「先祖祭祀」である。先祖祭祀は家の永続性と不可分なものであるが、上田家の寺という特殊性から、「先祖祭祀」が形式化せずに残ったとしても不思議はない。

「家の永続性」と「家族成員相互の情緒的關係」が同時に見られるが、これも、寺は住職の家族でなければ住むことが出来ないという、寺独特の理由から、情緒的關係を重んじるが、誰かが後を継がなければならないという状況が生まれたのである。

## **5.2 家族の変化と食卓**

前章では、家族の変化がどのようにして起こったのかを見てきた。本章では、その家族の変化と、食卓の変化の関係について述べていきたいと思う。

### **(1) 一度目の改装**

一度目の改装が行われたのは1945年である。上田家では、この時から、テーブルを使用した食事が行われるようになっており、普通の食事において上座・下座の席は見られ

なくなった。しかし、正月などの特別な日に畳の部屋で食事を取る際には、上座・下座の席順による食事が行われていた。

上田家の自宅は決して狭かったわけではない。他の部屋を食事部屋に使おうと思えば十分に出来たはずである。よって、限られた居住空間を有効に活用しようと、DK に変化したという理由はここでは当てはまらないことになる。台所の改装の主導権を握ったのは紀美子であった。改装以前から、家制度の特徴のいくつかはすでに消滅していたことや、改装が決まった時点で、紀美子が幼稚園経営に深く関わることは決まっていたことから、紀美子の発言力は高まったに違いない。すでに家制度が衰退し始めていたからこそ、紀美子の意見がスムーズに受け入れられたのである。

落合によると、この 1945 年は家制度と決別しないままの核家族化が進行した時代にあたる（落合 1994）。上田家においても、「家長権」の縮小や「家産」の意識の希薄化など、家制度の衰退していたものの、上座・下座の名残があったことや、紀美子は書類上、晃道の扶養家族であり賃金を得ていなかったことなどから、家制度自体は完全に崩壊したわけではなかった。また、この頃には、寺へ風呂や電話を借りに来る人が減り、改装によって以前よりも、生活空間が玄関から遠ざかるというように、プライバシーの成立という近代家族の特徴の下地が出来ていることがわかる。

## （2）二度目の改装

二度目の改装は 1985 年に行われている。この時も、テーブルを使用して食事をとっていた。しかし、以前とは異なり、お正月でさえも、テーブルで、上座・下座も関係なく座り、上座・下座の席順が家族内の食事風景の中に見られることはなくなった。

落合によると、1975 年以降は、家制度は本当に消滅するか、根本から変質し、脱近代家族化してゆく時代にあたる。（落合 1994）上田家においても、「家の永続性」と「先祖祭祀」という家制度の特徴の一部は、寺という家業の性質から失われていないが、上座・下座の席順に表される、家の規範や家族内の序列は消え去っており、家制度は実質的に崩壊したといえる。また、近代家族の特徴である性別分業や、非親族の排除も見られなくなっていることから、家制度の崩壊と平行して、脱近代家族化が始まっていたことがわかる。

以上のことから、「チャブ台からテーブルへの食卓の変化は、家族が家制度から近代家族・脱近代家族へ変化したことにより起こった」という仮説は立証されたことになる。テーブルを使用するようになった結果として家族規範が消滅したのではなく、家制度の崩壊や脱近代家族化という家族の変化が起こっていたからこそ、テーブルという食卓が家族内

に受け入れられたのである。

### 5.3 おわりに

食卓の変化は、家族の変化と密接に関係して起こったものであったというのが、祖父・祖母のライフヒストリーを聞くことにより浮かび上がってきた本稿の主題である。筆者自身、ライフヒストリーを読み解きながら、祖父・祖母の言葉の各所から広がるさまざまな分析の小道に何度も迷いこみそうになってしまった。それほど、ライフヒストリーの語りの中には、当時の家族の様子生き生きと描き出す豊富な情報が含まれていた。

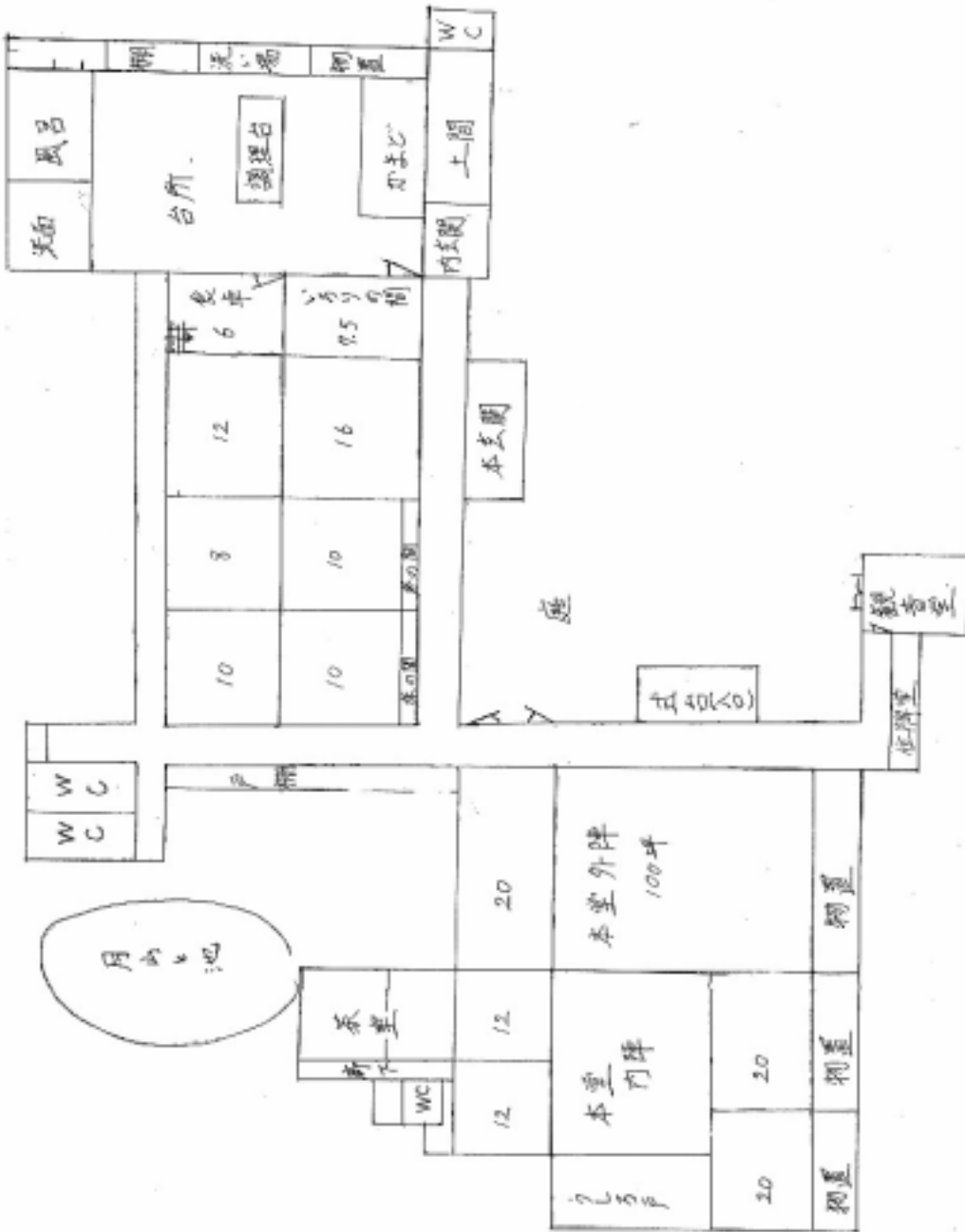
一言で家族と言っても、在り方は様々であり、それぞれに個別の歴史を持っている。本研究は、食卓が変化した当時の家族の具体的な営みが明らかにされたという点において、意味のあるものになった。

40×30字 32頁

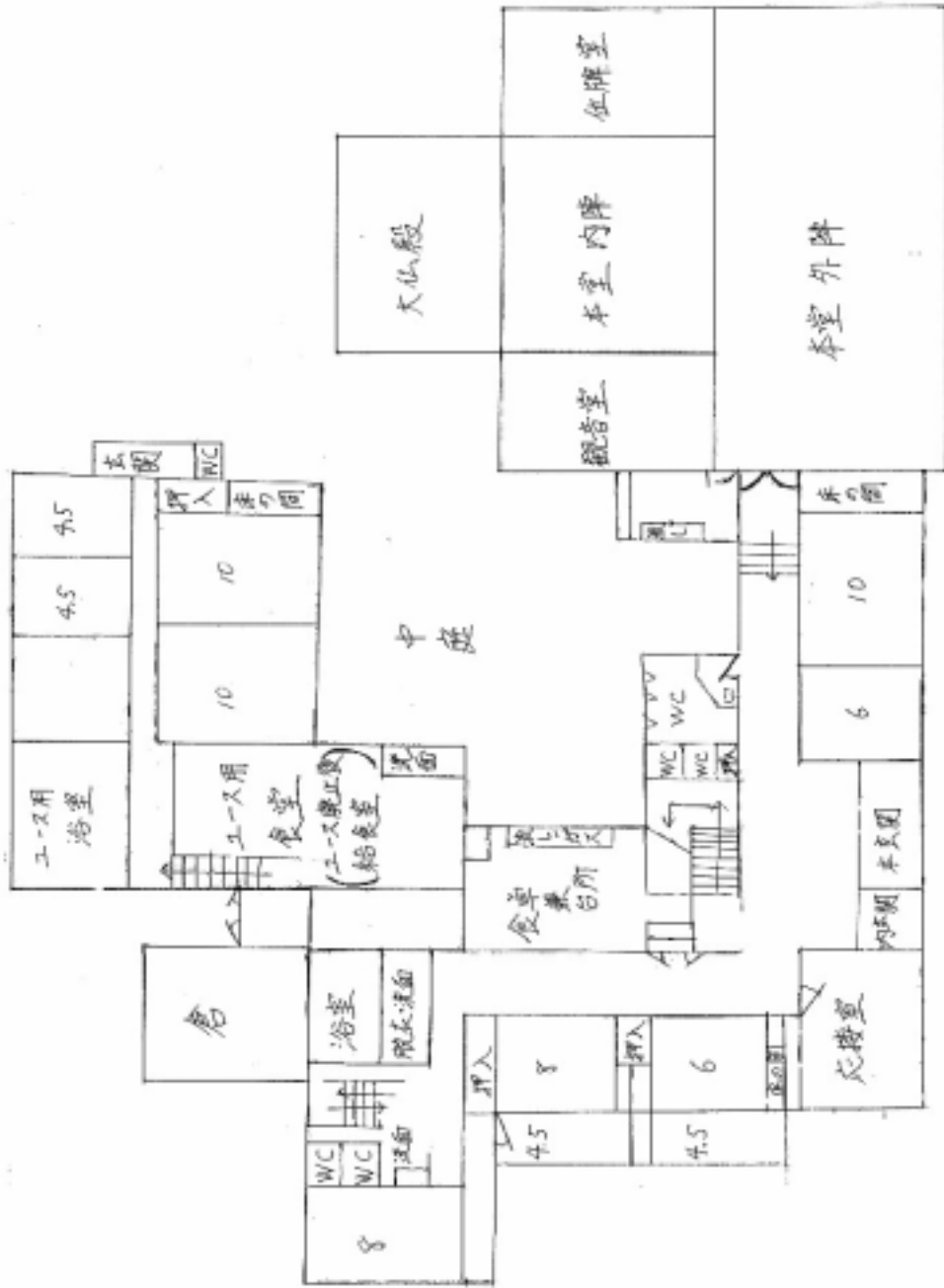
原稿用紙 75枚

# 付録

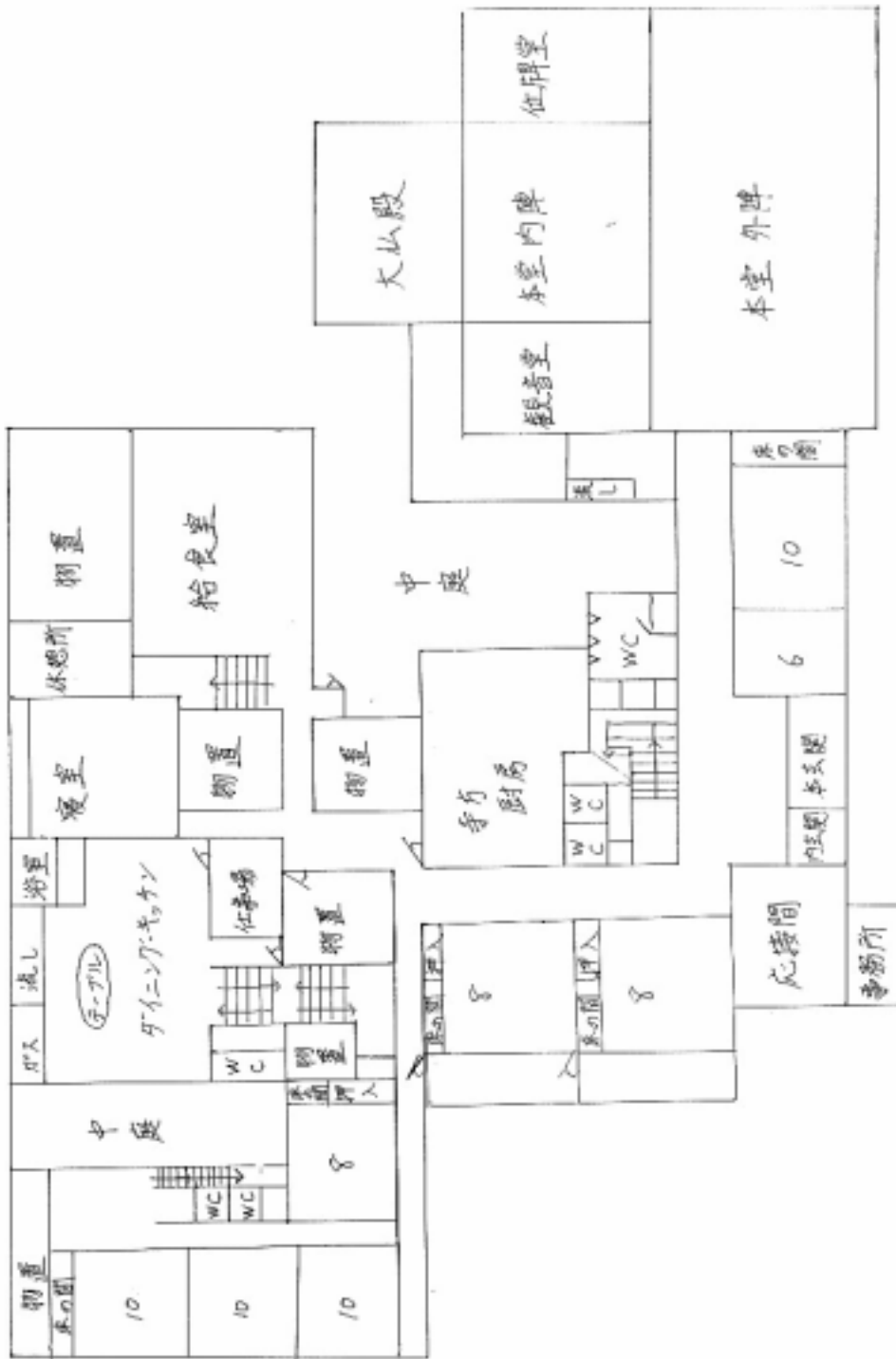
見取り図 ( ~ 1945年 )



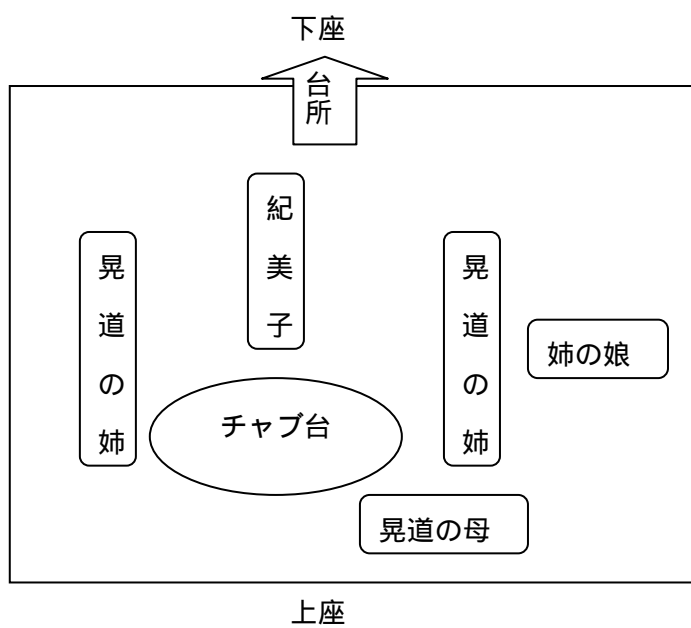
見取り図 (1946年~1985年)



見取り図 (1985年~)



1965年の改装前の食卓の様子



上の写真は、晃道の姉が実家に帰ってきた際に撮った食事後の団らん風景である。撮影は晃道が行っているため写っていない。

## 参考文献

- 石下直道, 1882, 『食事の文明論』中央公論社 .
- , 1991, 「食卓文化論」『国立民族学博物館研究報告別冊』16 : 3-54 .
- 井上忠司, 1991, 「食卓生活史の量的分析」『国立民族学博物館研究報告別冊』16 : 68-71 .
- , 1999, 「食事空間と団らん」井上忠司編『講座・食の文化 第5巻 食の情化』  
味の素食の文化センター .
- 落合恵美子, 1990, 「ある産婆の日本近代 ライフヒストリーから社会史へ」荻野美穂・  
田邊玲子・姫岡とし子・千本暁子・長谷川博子・落合恵美子『制度としての 女』  
平凡社 258-322 .
- , 1994, 『21世紀家族へ(第3版)』有斐閣 .
- 松本通晴, 1981, 「家の変動ノート」同志社大学人文科学研究所『共同研究日本の家』  
国書刊行会, 85-1